

詩人 パスカル

内 山 憲 一

Poet Pascal

UCHIYAMA Kenichi

1. 『パンセ』とはなにか

高校三年から浪人時代にかけて、後に作家となる柳田邦男の勉強机の一角には、常に『侏儒の言葉・西方の人』と『パンセ』が並んでいたという。柳田の『もう一度読みたかった本』（平凡社）でこれを知ったときには、少し意外な気がした。心の問題についての著作も少なくはないが、もともとノンフィクションライターとして名を成した社会派柳田というイメージとのずれを一瞬感じたからである。と同時に、自分自身の読書歴との親近性も感じた。田舎の高校生の頃、特に卒業間近のころには、私は和洋の深い学識に支えられた芥川龍之介の理知に憧れていて、とりわけ当時、大学入試の国語でもよく出題されていた『侏儒の言葉』や『或阿呆の一生』に見られる警句に傾倒していたように思う。今手元にはないので定かではないが、校内誌の卒業生一言にも、『或阿呆の一生』の文体をまねて自己分析をした短文を寄せたように記憶している。

ブレーズ・パスカル（1623-1662）の『パンセ』の方は大学に入ってからではないが、フランス語を本格的に勉強するようになってから、まずフランス古典主義を代表する著作として、有名ないくつかの断章を原文で読み、大学院に入ってから学術的な観点からももう少し詳しく読む機会があった。枕頭の本と言えるほど隅から隅まで精読しているわけではないが、折に触れてひもといってみる本である。前述の芥川作品と同様に比較的短い断章からなっていて、その一つ一つを独立して味読することができるという点で取りつきやすい。中にはあの有名な「人間は考える葦である」や「クレオパトラの鼻。それがもっと低かったなら（原文を直訳すると「短かったなら）」、地球の表情はすっかり変わっていただろう」のような文章がちりばめられている。また、三五〇年ほど前の文章ではあるが、現代フランス語

の書き言葉とほぼ同じという点では読みやすい。文学史上、近代フランス語散文の規範となったのがこのパスカルである。

ところで、『パンセ』は断章の集積という観を呈している書物であるが、その出版の経緯について説明しておく必要がある。パスカルが亡くなって八年後の一六七〇年に初めて出版されたこの本のタイトルは「死後、書類の中から見出された、宗教及び他の若干の主題に関するパスカル氏の断想 (パンセ)」であった。「パンセ」とは動詞「考える」の過去分詞が名詞化したものであり、ここでは簡潔な表現にまとめられた思索を指すが、ともかく一種の遺稿集であるこの通称『パンセ』のタイトルは著者がつけたものではない。モラリスト文学として、あるいは思想書、信仰の書として読み継がれている古典であるが、実は無神論や自由思想に反駁して、キリスト教の正しさを説得することを目指す護教論として構想されたものであることが知られている。

その護教論準備段階の下書きや覚書は彼の死後、大きさも形も不揃いな紙片に書きつけられた断片の形で発見された。彼自身の手によるものもあり、口述筆記によるものもある。ある程度の推敲を経た、まとまった文章もあるが、急いで書きなぐったような孤立した断片も少なくはなく、現在に至るまでこの原稿の判読・整理は続けられている。さらには、もし護教論が一冊の書物として完成した形で世に出たならば、パスカルはおそらく自分の名前は秘しただろうことが、研究者たちによってほぼ確実視されている。『パンセ』はこのように、完成に至らなかった匿名の護教論と断片を寄せ集めた遺稿集という二つの極の間を揺れ動くテキストであり、著者がどのような人物かわきまえたうえで、文学作品として、あるいは思想書としてそれに向かうとき、われわれの読み方は作者パスカルが望んでいたような読み方ではないということになる。これを逆に言えば、読み方を選択できる「開かれたテキスト」とも言えるのではないだろうか。

2. 幸せになるためには、自分を知らないほうがよいのか

そのパスカルとはいったい何者であろうか。多方面に才能をきらめかせた才子であるが、実は父の方針で学校には通わず自宅で学んでいる。数学では十六歳で「円錐曲線試論」を発表するなど早くから頭角を現し、その後も確率論や微積分学へと通ずる業績を残した。物理学においても大気圧と流体の平衡の実験で大きな功績をあげ、気圧の単位「ヘクトパスカル」に名前を残している。ところが生来病弱で、青年期から「一日も苦痛なしに過ごしたことがない」との証言も残っている。三十一歳の時、晩秋の一夜の神秘体験を経て決定的に回心し、内面的な信仰や厳格な道徳を旨とするポール・ロワイヤルの隠士たちに同調し、カトリック改革の機運が高まる中で護教論に取り組むことになる。

「世界の文学」という授業で理系の学生たちにフランス文学について語る際には、私はいつも最初に『パンセ』のある断章を紹介することにしてはいる。類まれな科学者としての才能

を持ちながら、科学の世界のみには安住できず、人間性の探求を志したパスカルの経歴をうかがわせる一文である。

私は長いあいだ、抽象的な学問の研究に時間を費やしてきた。けれどもその中で人と通じあうことがほとんどないことに嫌気がさしてしまった。人間の研究を始めたときには、あの抽象的な学問が人には向いていないということが分かった。それに深入りした私の方が、そんな学問を知らない他の人たちよりも、人間としての自分の境遇から迷い出ていることにも気づいた。私は他の人たちが抽象的な学問に無知であることを容赦した。でも私は、せめて人間の研究においては多くの仲間が見いだせるものと信じていたし、それこそが人間に向いている真の学問であると思ったのである。私の期待は裏切られた。人間を研究する人は、幾何学を研究する人よりもさらに少ないのである。人間を研究する術を知らないからこそ、みな他のものを求めてしまうのだ。けれども、いったいそれは人間がすべき学問ではないのだろうか。幸せになるためには、人は自分のことを知らないほうがよいのだろうか。(B144、S566)¹

パスカルを原文で読んだのはフランス語を本格的に習い始めてからであるが、実はこの断章の翻訳は高校生の時に国語の問題集で読んでいた。そのことに気づいたのは『パンセ』を好んで読むようになってからだ。それはともあれ、最後の文にある「幸福」とはパスカルにおいては、もちろん偽りの幸福である。自己を直視することを恐れるからこそ、人は気晴らしに逃避するのだ。例えば次のような一節がある。

ほんの数か月前に一人息子を失い、訴訟や争いごとに思い悩み、今朝はあんなにも心乱れていたあの男が、今はもうそんなことを考えていないのはどういうわけか。驚いてはいけな。獵犬たちが六時間も前からあんなにも熱心に追っている猪がどこを通るのか見きわめるのに、すっかり心を奪われているのだ。それ以上のことは要らない。人はどんなに悲しみに心ふさいでいても、なんらかの気晴らしに浸らせることができれば、なんとその間は幸せだ。それにどんなに幸せを感じていても、悲嘆が広がるのを防ぐ情熱なり娛樂なりに気を紛らわされ、心をとらえられていなければ、人はほどなく憂鬱に心ふさいでしまうのだ。気晴らしなしに喜びはない。気晴らしがあれば悲しみなどない。(B139、S168)

¹ 『パンセ』の原文はフィリップ・セリエ (Philippe Sellier) による校訂版 (本論末の参考文献を参照) を参照した。一般に流布しているブランシュヴィック版による断章番号をBの後に、セリエ版による断章番号をSの後に記した。この断章を含め、訳者名を付記していないものは拙訳による。

「気晴らし」というのはパスカル独特の用語で、「そらせる、転じさせる」が原義の動詞から派生した名詞である。では何から「そらせる」のか。神という至高の存在に向かうことによってしか、死すべき人間は己の本質的な空虚さを埋めることができない。パスカルはそう考える。気晴らしは一時的に空虚さを紛らわせるのみであって、本来志向すべきところへと向かうことを妨げる。それに実はパスカルのラディカルさは、さらに上を行っている。彼によると、われわれが真剣に取り組んでいる活動もすべて、信仰にかかわるものでない活動はみな気晴らしなのである。だから、最後の断定部分はもちろん、文章に精彩を与える皮肉である。

この引用は比較的長い断章を切り取ったものだ。他の多くの断章よりも推敲の手が入っているようであり、パスカルの文章の魅力が感じられると思う。皮肉な断定口調や読者への直接的な呼びかけ（「驚いてはいけない」、またこれに続く部分に出てくる「注意したまえ」など）が文章に勢いを与えている。

3. 人は天使でも獣でもない

それにしても、あからさまに信仰だの神だのと言うだけなら、多くの人の心はつかめない。そこで、切れ味鋭いキャッチコピーのような、いかした短文を挙げてみよう。

人は天使でも、獣でもない。それに不幸なことには、天使のふりをしようとして、獣になってしまうのだ。(B358、S557)

これで全文の短い断章であるだけに、天使 - 獣という対比によってパスカルが何を言いたいのかは、関連する他の断章、及び『パンセ』以外のテキストを参照して考え合わさなければならない。護教論の構想者にとって、人間はアダムとイブによる創造主への背信（旧約聖書「創世記」）以来原罪を負い、本質的に墮落した存在（獣）である。パスカルの筆は厳しい。人間は「怪物」であり、「混沌」であり、「弱々しいみみず」である。しかしそれは「不確かさと誤謬の汚水溜め」であるにもかかわらず「真理を保管する者」である。「宇宙の屑」であると同時に「栄光」でもある（B434、S164）。人間は確かに天使ではないが、獣でもない。人間には思考する能力が備えられている（「人間は考える葦である」）。自らが悲惨であることを自覚している。外界に押しつぶされそうな、弱々しい一本の葦のような存在であるが、「真理を保管する」器でもある。

ただ、保管はしていても享受することはできない。人間は天使と獣の間に位置する中途半端な存在で、真の幸福を希求するのは失われた楽園への郷愁があるからである。パスカルによると、人間は「至福」という観念は持っているが、それに到達することはできず。「真理」のアイデアは持っているが、虚偽にまみれて生きている。無知にとどまることはできないが、

確実に知ることもできない。「私たちはかつて完璧な段階にいたのではあるが、そこから不幸にも墮落してしまったことは明らかである。」

彼が自賛するならば 私はおとしめてやる
彼が自らをおとしめるなら 私はほめあげてやる
そしていつまでも反論しよう
自分は不可解な怪物であると
彼が理解するまでは
(B420、S163)

この独立した断章は一編の詩として提示しても違和感はないように思う。草稿も行分けされているので、あえて句読点を省略し、詩であるかのように訳してみた。この断章において、「彼」が人間一般を指すとすると、まさに天使-獣の対比につながる。彼が自分を天使のような存在と自慢するならば、私は彼に人間の本質的な空虚さを思い出させてやる。彼が獣のように振る舞うならば、自分が惨めな存在であることを知っているという点では偉大であることを思い出させる。

これはあの「気晴らし」のテーマにもつながっている。人間の本質を直視しようとせず、気晴らしにふける人は、まるで獣のように振る舞っていると考えるのだ。ただし他の観点においては、人間は一種の偉大さをも内包していること、それも合わせ指摘しなければならぬ。一方のみしか知らないことは危険である。高い境遇から墮ちただけに人間は惨めであり、その惨めさは偉大さから帰結され、偉大さは惨めさから帰結されるという円環がある。「怪物」はこの解きほぐすことのできない混沌を内包している。このようなパスカルの論法は極端であり、耳目を引く筆の過激さは護教論という枠組みが要請するものであろう。人間とは獣ではないが天使でもなく、現実から逃避するように霊的なものだけ追い求めることは不可能である。

一方、フロイトの理論も、この天使-獣の二項対立の断章に新たな様相を与えるものである。苦痛や不快感、恥など否定的な感情を伴ったりする心的内容を意識しまいとする無意識の働きが心理学でいう「抑圧」であるが、フロイトはある種の心理的障害や倒錯は、衝動の抑圧に起因することを示した。ある衝動を抑圧する（天使のふりをする）ことは、人格の障害を引き起こす一因ともなりうる。極端な場合には、その人格障害は罹患者に、傍から見ると獣のような行動を取らせるかもしれない。

フロイトはしかし「抑圧」を全面的に断罪したわけではない。個人の内面に抑圧がまったく働かない社会は想像することが難しい。衝動は否定したところで、無くなるわけではない。マイナスのイメージの衝動は、社会的に認められ推奨される活動にも昇華されうる。フロイトはわれわれに、負の衝動を否認して天使のふりをするのではなく、衝動に流されずに

制御して生きる、普通の人間であることを求めるのである。

4. 〈私〉とは憎むべきものである

フロイト心理学における「自我」は、フランス語訳では人称代名詞一人称単数の強勢形 moi に定冠詞をつけて表すが、この語を冒頭に置いて自我の問題を考察する印象深い断章がある。

〈私〉とは憎むべきものだ。ミトン君、きみはそれに覆いをかけているが、だからといって、それを取り去ることにはならない。だから、きみはやはり憎むべきものだ。

「そんなことはない。だって、ぼくらがしているように、皆に親切に振舞えば、ぼくらが憎まれる理由は、もうなくなるのだから」。——なるほど、もし〈私〉を憎む理由が、〈私〉のうちにあるに人々に不快な思いをさせる横暴さだけなら、その通りだろう。

だがぼくが〈私〉を憎むのは、〈私〉が不正であり、すべての中心になっているからだとすれば、ぼくは〈私〉をやはり憎み続けるだろう。

要するに、〈私〉には二つの性質がある。それは、自分をすべての中心に据える点で、それ自体として不正であり、他者を従属させようと望む点ではた迷惑である。というのも、各々の〈私〉は互いに敵であり、あわよくば他のすべての〈私〉の暴君になろうと望んでいるのだから。きみは迷惑を取り除くが、不正は取り除けない。

だからきみは、〈私〉の不正を憎む人々に対して、〈私〉を愛すべきものとすることはできない。そうできるのは、もはやそこに自らの敵を認めない不正な人間が相手の場合だけだ。だからきみは、不正であり続け、不正な人間にしか気に入ってもらえない。(B455、S494) (塩川徹也訳)

対話形式は、堅苦しい論調を避け、相手に柔らかかににじり寄り説得しようとするレトリックの巧者の工夫である。ここでは、教養と会話術を身に着け、洗練された物腰で相手と接することのできる社交人としての理想像、すなわち「オネットム」を代表する人物でダミアン・ミトンという友人が対話の相手となっている。〈私〉を形作る自我は本質的に不正で憎むべきものであると断言するパスカルの筆は、当時彼の周りにいる人たちにとっても過激と映ったようである。『パンセ』初版には、作者が口癖のように用いていたこの〈私〉という語は「自己愛」を指すものであるという注が添えられていたという。

パスカルによると、自我は二重に憎むべきものである。第一に、〈私〉の発露は他者の〈私〉には常に不利に作用する。ミトンのように自我に覆いをかけ、対人関係を快適なものにする術を心得ている紳士ではあっても、〈私〉がそこにあることは変わりなく、慎みを装いながら暴君として、優越欲と支配欲を持って、現れ出る機会を待っているのだ。

自我を憎むべき第二の理由はその本質にかかわるものであり、人はそれから逃れることはできない。それは〈私〉の自己中心性であり、人間に内在する高慢を表すものである。キリスト者は謙虚でなければならない。創造主の前では何ものでもないことを、わきまえていなければならない。完成した護教論が出版された暁には、おそらく作者名は伏せられただろう。そのような推定の出発点はここにある。社交術は〈私〉を隠すが、真の信仰は〈私〉を滅するものかもしれない。

5. われわれは想像上の自分を飾り立て、本当の自分をないがしろにする。

人は親切に振舞ったとしても、それは他者から親切であると思わせてもらいたいからだろうか。心の内に打算を秘めて行動したつもりではなくとも、〈私〉は慎み深い様相を示した後で、それを布石として他者の〈私〉を支配下に置く機会をねらっているのだろうか。人間の心の複雑怪奇な様を提示する断章、『パンセ』の中でも特に心惹かれる一編がある。

われわれは、自分のうち、自分本来の存在のうちで営む生き方に満足できない。われわれは、他人がわれわれについて抱いている観念のうちで、もう一つの想像上の生き方をすることを望み、そのために見かけを整えることに心を砕く。われわれは絶えず想像上の自分を飾り立て、それを後生大事に守り、本当の自分はないがしろにする。今、わが身に、心の平安、気高さあるいは信義が備わっているとしよう。われわれは早速、それを知ってもらうために、これらの美德をもう一つの自分に結びつけ、そのためなら、自分自身からそれらを切り離すこともいとわない。勇者の評判をとるためになら、われわれは喜んで臆病者になるだろう。われわれは、想像上の自分なしには自分に満足できず、しばしば一方を他方に取り替える。これこそ、われわれ本来の存在が虚無に等しいことの、何よりの証拠だ。実際、名誉を守るために命を捨てなければ、卑怯者の汚名を被るではないか。(B147、S653) (塩川徹也訳)

パスカルの筆致は精彩に富み、論の進め方は極端であると思わせるところがあるが、なぜか魅了されてしまう。われわれ誰もが、普段周りの者に見せている顔とは違う顔を内面に秘めているのではないか。自覚の程度は人により異なるだろうが、周りの者に見せている顔は一種の仮面なのではないかと思うときがある。ユング心理学の用語「ペルソナ」が思い浮かぶ。ペルソナとは、まさしく役者がつけていた仮面を指すラテン語に起源を持っている。社会生活を営む上で必要な顔、例えば職業上期待されるような顔、つまり人が外界と立ち向かうときにつける仮面がペルソナである。これは人の発達段階や社会的地位によっても変わるもので、一生を通して多くのペルソナが身につけられる。いくつかを同時に合わせ持つこともある。

ペルソナは一般に社会生活の中で自己を防御するものであるが、パスカルの断章にこれを当てはめると、それは他者を牽制しつつ取り込もうとする仮面である。また、家の中でつけるペルソナもある。あるいは、外でつけていたペルソナを家に帰ってもはずせない人がいる。人が自分のペルソナと密着しすぎると、それは心理的な堅さ、脆さをもたらすことになるという。他者に見せる自分を飾り立て、それを後生大事にして、本当の自分をないがしろにしていると、ある日仮面は堅くなりすぎて、取れなくなってしまうのではないか。無理に引きはがした仮面の下に顔はないのではないか。「われわれ本来の存在は虚無に等しい」というパスカルの言葉が痛切に響いてくる。

もちろんパスカルの言う「虚無」とは、あくまでもキリスト教の創造主に対する人間という存在に付された言葉である。その用語や推論の仕方をよく理解するには、神学的知識や護教論構想当時の社会状況に関する知識が必要だ。パスカル自身の他の著作も読み込まなければならない。ただ、一つの作品をよく理解することは、それを好きになることには必ずしもつながらない。『パンセ』が綿々と読み継がれてきたのは、そこに人間の本性に関する豊かな考察が溢れているからだ。

人間の生に不可避的に付随する虚偽性を指弾するパスカルの声は高く、雄弁に心をつかみ、己の惨めさの自覚を刺激し、その解決策を希求するようにしむける。その言葉遣いには冷静な思弁家やモラリストが認められる一方で、直観鋭い詩人のような閃きも感じられる。例えば有名な二つの無限の断章 (B72, S230) などは、幾何学的に均斉のとれた文章の中に両者が心地よく調和していて、特に出だしの部分は散文詩のように味わうことができる。実証的な研究者たちからは一蹴されそうであるが、多くの断章はそのように味読することができるのではないだろうか。その成立事情からしても、『パンセ』は開かれた作品であり、誤読を恐れずに自由な読み方が許されるはずである。

6. パスカールと詩

人間を怪物であるとする先ほどの断章は、なぜ詩のように見えるのか。もちろん、行分けが施されているからといって詩であるわけではない。最初の二行は動詞「ほめそやす vanter」と「おとしめる abaisser」が交差配列に置かれていて、均斉のとれた文章になっている。ただし、同時代人ラシーヌの古典悲劇のように脚韻を踏んでいるわけでもなく、一行の音節数が奇数であったりして、伝統的な美の規格には適っていない。他の断章と組み合わせられ融合され、大きな文の中に組み込まれる断片であることに起因するのだが、最初から代名詞（「彼」または「それ」）が投げ出され、結びも何か不可解なもので終わっている。代名詞が受ける元の主語は何なのか、「彼」が怪物であることを知り、高みからそう宣告しているように見える「私」とはいったい誰なのか。この独立した断片だけを読むならば、読者の想像力は詩を読むときのように大いに刺激される。

パスカルは詩、あるいは詩人をどうとらえているのか。「詩的な美」と冒頭に記された興味深い断章がある。

詩的な美と言うように、幾何学的な美とか薬学的な美と言ってもよいはずだ。ところがそうは言わない。その理由は、幾何学の目的は何であるか、つまり証明にあるということ、人は知っているからであり、薬学の目的は何であり、それが治癒にあるということを知っているからだ。ところが人は、快さというものが何で成り立っているのか分からない。その快さこそ詩の目的なのである。模倣すべき詩の本性の規範は何であるのか分からない。それを知らないがゆえに、人はある種の奇妙な表現を発明したのだ。「黄金の世紀」「当代の驚異」「宿命的な」等々。この種の変な言葉が詩的な美と称されているわけだ。

けれども、このように些細なことを大げさな言葉で言い表している用例に似た一人の女性を思い描いてみるがよい。鏡や鎖やらで、ごてごてに飾り立てた、かわいいお嬢さんを思い浮かべて、吹き出してしまいうだろう。なぜなら人は、詩句の快さよりも、女性もたらす快さのほうが、何から成り立っているのかよく知っているからである。

(B33, S486)

このようにパスカルは、本来ならば心地よさをもたらすべき詩が、どうでもよいことを大げさな言葉で飾り立てている表現に汚されていると指摘している。それに対して批判的であるというよりは、詩というものはパスカルの眼中にはないのではないか。だいたい、詩といえば古典主義時代においては韻文であり、最も純度の高い美文は、一般庶民ではなく高貴な人々の心の葛藤などを描いた悲劇であった。パスカルのいう「詩」とは現代における詩の概念とはまったく異なるものである。この詩に関する断章も、数学者なり、詩人なり、刺繍職人なり、なにか特定の看板を掲げるのではなく、どのような話題にも対応できることが理想とされるオネットムの優越性を語るもののうちの一つである。

われわれの本性とわれわれの気に入るものとの間には関係があり、その関係から成り立つ美と快さとの規範がある。パスカルによると、この規範にのっとって作られたものは、家であっても歌であっても女性であっても、すべてが快い。面白いことには、悪い規範は無数にあるのに対して、良い規範は唯一のものであるという。すべての良きもの、快いものは、パスカルの立つキリスト教観点からいけば至高の一点に収束するからだろうか。ところが、現代の広い意味における詩においては、「規範」という概念自体が無意味である。新味のない言葉を使ったとしても、その同じ言葉の異なった配置は斬新な閃きをもたらさう。パスカル自身、「同じ言葉が異なる配置によって別の思考を形作る」(B22, S575)「言葉は違った配列をすると違った意味を生み、違った配列の意味からは異なる効果が生ずる」(B23, S645)と言っているのではないか。言葉は決して一つの意味には還元できない。一つの言葉は数多く

の意味の塊であり、他の言葉との響きあいによって別の意味が立ち上がってくる。詩句が厚みを持って、ずっと立ち上がってくるように思えたことはないだろうか。

そのような詩句は必ずしも推敲を重ねた美文である必要はない。『パンセ』において、パスカルという人物が全身全霊で受け止めた啓示の閃きは、なにげなく書きとめられた断片にも写し取られているのではないだろうか。最後に、原文では行分けされていない小さな美しい断章を、詩であるかのように自由に訳してみたい。この世を足早に通り返ってしまったパスカルに寄せて ——

人が通り過ぎていく町
 そこではだれも
 尊敬されようとは思わない
 でも少しのあいだ留まるならば
 評価を気にしてしまう
 どれだけのあいだなら
 そうなるのか
 ほくたちの生きるあいだ
 むなしく取るに足らぬ生に
 見合うあいだ
 (B149、S65)

パスカルに関する主要参考文献

- Blaise Pascal, *Pensées*, Edition de Philippe Sellier, «Classiques Garnier», Bordas, 1991
 パスカル『パンセⅠ』『パンセⅡ』(中公クラシックス)、中央公論新社、2001
 塩川徹也『パスカル「パンセ」を読む』(岩波セミナーブックス80)、岩波書店、2001
 塩川徹也『発見術としての学問 モンテーニュ、デカルト、パスカル』、岩波書店、2010
 塩川徹也「本文批評とテキストの概念—デリダからパスカルへ—」、『仏語仏文学研究』第6号、pp.3-24、
 東京大学仏語仏文学研究会、1991

(うちやま けんいち 本学准教授)